

【目次】

・続 自己意識の中心に真理の扉がある	[2ページ目]
・「神秘主義思想における普遍性」について、おすすめサイトから引用	[4ページ目]
・神秘主義思想における「光」という普遍性について	[5ページ目]
・狩猟文化と農耕文化の思想の本質的な違いと、現世肯定の仏教について	[8ページ目]
・おすすめサイト「シャーマンと伝統文化の智慧の道」の中から印象的な内容を私個人の主観でピックアップ	[9ページ目]
・狩猟文化の世界観から見る仏教の役割についての考察	[16ページ目]
・仏教の歴史は、原点回帰の歴史である説	[18ページ目]
・「後期密教」と「狩猟文化の原地母神信仰」との共通性の比較	[20ページ目]
・「シャーマン病」「クンダリニー症候群」普通の人が踏み入れてはいけない領域であり、人が踏み入れてはいけない領域に近いギリギリの領域である説、「フォーカシング指向心理療法」「プロセス指向心理療法」一般的な実践としては、こちらが有効である説	[24ページ目]
・最も、基本的な実践方法は「祈り」である説	[26ページ目]
・最も、最適な「祈り」の方法は、神社やお寺に参拝することである説	[27ページ目]
・私個人の思想	[28ページ目]
・シャーマンの伝統世界における、世界の構造について、改めて解釈	[29ページ目]
・霊界、幽界と、シャーマニズムの天上世界、地下世界について	[31ページ目]
・本来の自己を思い出す	[33ページ目]
・睡眠は、特殊な輪廻転生の一種である説	[35ページ目]
・「1人1哲学」「1人1宗教」、だがその元を遡っていけば、真理に辿り着く説	[36ページ目]
・「意味」や「目的」は、本当は存在しない	[36ページ目]
・「本当は存在しない」と同時に、「全ての可能性が存在する」	[38ページ目]
・真理は、ゴンドワナ型神話の中にある	[39ページ目]
・植物や微生物は神に近い存在である説	[41ページ目]
・我々に神の視点や、縄文時代の人々の視点や、他の生き物の視点を直接的には知り得ない	[42ページ目]
・それでも、「無償の愛」という絶対的真理がそこにはある	[43ページ目]
・神界、霊界、幽界について改めて考察	[45ページ目]
・カルマの法則、純粹記憶、シャーマニズムの地下世界についての解釈	[46ページ目]
・運命愛という悟り	[47ページ目]
・無色界の住人による世界の創造	[48ページ目]
・「存在しないと同時に全てが存在する」という悟り	[49ページ目]
・ $0=\infty=1$ についての解釈	[51ページ目]
・サイコシンセシス(統合心理学)についての解釈	[53ページ目]

おすすめサイト

- ・夢見の技術:<http://blog.livedoor.jp/morfo/>
- ・世界の瞑想法:<http://morfov.blog79.fc2.com/>
- ・仏教の瞑想法と修行体系:<https://ameblo.jp/morfo/>

+ α

(シャーマンと伝統文化の智慧の道:<https://morfos.blog.ss-blog.jp/>)

(神話と秘儀:<http://morfo.seesaa.net/>)

(神秘主義思想史:<https://morfo.blog.ss-blog.jp/>)

以下、私個人の解釈

【続 自己意識の中心に真理の扉がある】

シャーマニズム(～神話)

- ・白昼明晰夢(幻覚性植物あり or なし)による変性意識状態(トランス状態)のヴィジョン
- ・または臨死体験のヴィジョンも？(Wikipedia 情報から)

瞑想

- ・サマタ瞑想
- ・ヴィパッサナー瞑想
- ・生起次第
- ・究竟次第

etc.....

最もシンプルでかつ本質的なのは、サマタ瞑想であるのだろうと解釈した。
サマタ瞑想により「欲界」「色界」「無色界」の三界の存在が確認される。

そして、三界の存在を基に、変性意識状態や臨死体験によるヴィジョンは三界のうちのどの世界に属するのか？

他の瞑想において、三界のうちのどの世界を対象にした瞑想なのか？を考察していくのが流れとして良いのだろう。

真理の扉は自己意識の中心にあり、それは無色界であり void でありサマディであるのだろう。

また、仏教のサマタ瞑想に(性質や技法、方向性は違えども)近いと思われるものとして、

心を止滅させ、最終的に解脱する、ヒンドゥー教の“古典ヨガ”

最終的に神の自己顕現そのものとなり、神と一体化する、イスラム教の“ズィクル”

最後には自分自身も光そのものに溶け込むような体験をする、ユダヤ教の“メルカーバーの観想”

禁欲によって感覚的な欲望や肉体性を否定して、靈魂を浄化し、自分の内面へと下降し、生まれる前にいた靈魂の世界や自分自身の本質を想起する、オルペウス教団やピタゴラス教団直系の方法であるプラトンのアイデアを認識する方法としての“死の道”

神の活動である光と自己が一つになる、キリスト教ギリシャ正教の“ヘシュカズム”

神との合一体験をする、キリスト教カトリックの“十字架のヨハネ”

といった瞑想法があり、地域や宗教を越えた古典的な瞑想法としての普遍性のある瞑想法であると考えられる。

※巫病や禅病の危険性があるため推奨しません。現実的に行える可能性のある技法は瞑想のみですが、禅病の危険性があるため、行う際は専門の師の指導の元に行うことをおすすめします。

【「神秘主義思想における普遍性」について、おすすめサイトから引用】

神秘主義思想全般における普遍性のある思想を、参考となるサイトから紹介したいと思います。

＞人間の意識や世界にはいくつもの層(階層性)があるというのが、基本的な考え方です。

＞そして、表面的な層(低い層)の心や存在は、より深い層(高い層)が原因になって作られていると考えます。

＞その非日常的な意識や世界の価値創造性を、信じるというのではなく、直接的に体験することで意識を広げるのが神秘主義です。

＞神秘主義では、何かを信じるということではなくて、修行法に従ってその地図を確かめていくという経験主義的、実証的な発想が要求されます。

＞表面的な意識の世界では、言葉やイメージは、意味や形がはっきりと固定しています。

深層の意識の世界になると、意味や形が動的になって、象徴的、多義的になります。

＞表面的な意識の世界では、主体と客体(認識の主体と対象)ははっきり分かれています。

深層の意識の世界になると、境界が曖昧になり、最終的には一体になります。

＞一体となったものは、一切の性質や区別がなくなると同時に、すべての性質や区別があるようなあり方になります。

＞様々な宗教の公教の部分には大きな差があっても、その秘教の部分では似ていることが多いようです。

詳しくはこちらのサイトをご覧ください。

引用: <https://morfo.blog.ss-blog.jp/2011-03-20>

【神秘主義思想における「光」という普遍性について】

おすすめサイトの記述を基に、「光」についての普遍性について探っていきたいと思う。

アボリジニのコスモロジーと高位イニシエーション [伝統文化のコスモロジー]

<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-17>

＞アボリジニの社会では、先祖とのコミュニケーションは、高位の長老が担います。
高位イニシエーションは、天空の英雄とトーテム先祖が司ります。

高位イニシエーションは、天空、地上、地下の3つの領域を自由に往来できることを目指します。

高位の長老になることは、天空のエネルギーと一体になることです。
死に臨んだ長老は、青空を眺めて、そこに見える光の粒子と一体化する瞑想を行います。

内部閃光と唸り声 [イニシエーション]

<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-10-15-1>

＞シャーマンがトランス状態に入る時、あるいは、入った時に、典型的に現れる言葉やイメージ以前の生理的な「幻視」と「幻聴」があります。
これらは、「魂の世界への入口」、「変身への入口」だとも考えられています。
幻覚植物を摂取した場合にもこれらが現れます。

幻視は、「内部閃光」などと称される、幾何学的な図形などです。
世界中の石器時代の洞窟壁画やペトログリフには、そのような図形が多数、描かれています。

火と金属と鍛冶、光と水晶 [イニシエーション]

<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-09-30-1>

＞「光」は暗闇と地下世界での視力、つまりシャーマンのトランス状態での「霊視」能力を支える力の象徴です。

多くのシャーマンは完全なシャーマンとなる途中で、強烈な「光」の体験を経験して「霊視」能力を得ます。

＞その「光」を貯めた「パワー・オブジェクト」が「水晶」とされます。
「水晶」は、「光を凝縮した物」、「精液の結晶」、「天の霊の涙」などであると考えられていて、太陽や天上界とも関係づけられています。

シャーマニズムにおいて、このような「光」についての普遍性が見られる。
また、この「光」の普遍性は、仏教の瞑想時や、臨死体験においても見られる。

世界の瞑想法 安般念(出入息念)

<http://morfov.blog79.fc2.com/blog-entry-25.html>

(ミャンマーで行われているパオ流の瞑想において)

＞また、集中が深まることで、光の体験(単に「ニミッタ(相)」と呼びます)が現れることを重視する点が特徴です。

Wikipedia「臨死体験」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%A8%E6%AD%BB%E4%BD%93%E9%A8%93>

3 臨死体験のパターンと経験者の変化

3.3 光体験

＞臨死体験が起こると、まず暗いトンネルの中に浮かんでいる自分に気付き、その次に「光」を見るという体験をする者が多い。この「光」は死んだ肉親の姿や宗教的人物の形をとる事もある。

体験者の多くはこの光に包み込まれ、保護されているという感覚を抱く。この「光」は恋人や家族から感じるものとは比較にならないほどの愛情を持っているように感じられるため、遭遇後に精神的な変容を遂げる体験者が多い。

また、瞑想においてサマディという世界と一体化した状態の体験があるが、「一体化」という普遍性について、このようなものが見られる。

アボリジニのコスモロジーと高位イニシエーション [伝統文化のコスモロジー]

<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-17>

＞後述するように、長老は、多段階のイニシエーションを経て、天空の世界に一体化していきます。

＞高位イニシエーションは、天空、地上、地下の3つの領域を自由に往来できることを目指します。

高位の長老になることは、天空のエネルギーと一体になることです。
死に臨んだ長老は、青空を眺めて、そこに見える光の粒子と一体化する瞑想を行います。

狩猟文化と原地母神信仰 [伝統文化のコスモロジー]

<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-05>

＞狩猟文化のシャーマン的な神秘思想を考えると、その核心は、日常的な自我を殺すことによって、「原地母神」として表される創造力に合一し、再生することです。

農耕文化の天地聖婚・穀霊信仰 [伝統文化のコスモロジー]

<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-08>

＞狩猟文化の宗教の本質は、原地母神の創造性と一体化することですが、農耕文化の宗教の本質は、再生した穀霊としての純粋な霊魂と一体化することなのです。

【狩猟文化と農耕文化の思想の本質的な違いと、現世肯定の仏教について】

また、狩猟文化と農耕文化の思想の本質的な違いについて、興味深い違いが見られる。

狩猟文化と農耕文化の思想の本質的な違い [その他の雑文・雑論]

<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-16>

狩猟文化

＞あるがままの自然の創造性を尊重し、その恩恵を正しく受容しようとする思想を持っています。

＞意識に現れるあるがままの心の動きを自覚して受容し、それが引き起こす変化を「なるがまま」に展開します。

＞冥界は地上の創造の基盤であり、冥界に戻ることは母のもとに戻ることに、つまり、「死」とは「再生」のことです。

＞逆に、無意識から現れる心の動きを抑圧すると、それは強迫的に何度も意識に再帰して、意識に否定的な力を及ぼします。

これは、報われない死を遂げた人間や動物の霊が、あの世に成仏せずに怨霊として共同体に悪い影響を与えられられることと似ています。

※タオイズム、ゾクチェン、フォーカシングやプロセス指向心理学に受け継がれている

農耕文化

＞自然の存在を管理することを重視する思想を持っています。

＞欲望を制限、抑圧し、雑念を払い、意識的な自我の管理を重視します。

＞冥界や冥界神は、天空神を弱体化したり、穀童を誘拐したりするような、悪い価値を帯びた場所です。

※主要な宗教、哲学、科学、精神分析学などに受け継がれている

同じ仏教でも、時代や宗派によって解釈は全然違ってくる。

上座部仏教は「現世否定」的な側面が強い一方、後期密教やゾクチェンは「現世肯定」的な側面が強い。

世界の構造に普遍性があっても、その意味や解釈についての真理は1つだけではないのかもしれない。

参照: 現世肯定の仏教へ

<https://ameblo.jp/morfo/entry-12109674499.html>

【おすすめサイト「シャーマンと伝統文化の智慧の道」の中から印象的な内容を私個人の主観でピックアップ】

シャーマンと伝統文化の智慧の道

<https://morfos.blog.ss-blog.jp/>

このサイトに記述されている内容の中から、私個人の思う重要だと思う部分をピックアップしてまとめてみました。

詳しい内容は、直接サイトをご覧ください。

[三世界]

世界樹(世界山): 三世界をつなげている

● 天上

● 地上(中間世界)

● 地下(冥界)

・世界樹の枝: 人間として生まれる予定の魂が宿っている

・生命の泉: 世界樹のもとにあり、そこから生命の水が湧き、川が四方に流れ出している

[天上世界]

●指導霊(ティーチング・スピリット)

●守護霊(ガーディアン・スピリット)

※心理学的には、一種のハイヤー・セルフ(深層の自己のような存在)

●英雄

彼らから助言などを受ける場所

偉大なシャーマンは魂の世界に留まり続けて、再生することがない

高い層の天上世界ほど、簡単には行けない

・複数の層(7層や9層)から構成

・最高天:創造神、テングリ(天神)、バイ・ユルゲン(大いなる者)⇒ 太陽との結びつきが強い

・下方の天:7人の息子達、9人の娘達と呼ばれる神々

・一番下の天:生命の湖、人間の出産を司る北極星の女神

[地上世界の異界]

●様々な異界に行くための拠点となる場所がある

・天上世界や地下世界の霊を、ここに招く

・シャーマンが夢見を行う場所

・地上の日常世界と重なって、その背後には魂が本来の姿を現す「魂の世界」がある
⇒ 地上にいる植物や鉱物などは、「魂の世界」では、本当の姿を現す

[地下世界]

●パワー・アニマル

※心理学的には、自我がこれから統合しようとしている無意識の力の象徴のような存在

●援助霊(スピリット・ヘルパー)

※曼荼羅や象徴体系の原型:パワー・オブジェクトやスピリット・ヘルパーを4方や、12の月に配置

・挑戦と力の場所

・死者のいる「冥界」:困難な道を越えて行く、冥界王、各氏族の祖霊、祖神がいる

・地下にもいくつかの層がある

精霊的存在:怪物のような恐ろしい存在であると同時に、知識を授けてくれる教師的存在でもある ⇒ 体の各部位を表す呪術的な言葉を教えられ(言わされ)、様々な病気の原因と治療に関する知識を得る

呪術的な言葉:体の各部位を操作する力を持つ、儀式などで精霊との会話で使う、精霊を呼び出す「パワー・ソング」で使われることもある

[自然の循環・再生、イニシエーション]

●死者は徐々に無個性な祖霊に帰一して、やがて、新しい霊魂として再生する(同じ血筋の子孫に生まれ変わる)

※正常ではない魂は、死者の世界に入って祖霊になれず、地上を彷徨って死霊のままにとどまり、人間に災いをもたらす

(あまりに悪行を行った人間、恨みを持って死んだ人間、異常な死に方をした人間、若くして死んだ人間、子供を持たずに死んだ人間の魂など)

※生まれてまもなく亡くなった場合は、再度、生まれ直すことになる

●英雄などの特別な霊魂は、一定の不死なる(再生能力のある)個性を保った存在となる

※天上などのあの世にとどまり、祖霊に溶け込むことも、生まれ変わることもない

高位イニシエーション:「不死性」の獲得を目指す(根源に一体化して、生と死を相対化し、最大限の再生力・創造力を身につける)

祖霊:個的な性質を落とした人間の普遍的で純粋な魂、未分化で様々な可能性を秘めている存在

～狩猟文化～

原地母神(太母):生命を生む根源的な力を持つ存在、すべてを生み育て、魂の循環を司る

※息子(=男根)を自身の一部として含む両性具有的存在

・人間を生む「人間の母」という側面

・動・植物を生む「動・植物の母(主、山ノ神)」という側面

・天体や自然を生む「創造母神」という側面

・火を生む「竈神」という側面

・大地そのものである「地母神」という側面

・あの世を主宰する「冥界母神」という側面

様々な側面がある

世界樹:原地母神の象徴、依代

地上の存在は、人間も動物も、植物も、鉱物も、太陽などの天体も、すべて「原地母神」の子供、本質的な違いはない

人間や動物の魂は、現世と冥界を循環する

狩り、食事、葬式は、魂を送り返す一連の行為であり、「再生儀礼」と一体のもの

狩猟文化の核心:「原地母神」として表される創造力に合一し、再生すること

※「森」の中から現れる「動物」は、人間のために「冥界」にいる「動物の女主」が送ってくれる存在

⇒ 同様に、「無意識と意識の境界」から現れる「心の要素」は、人間の心の成長のために、「無意識」の「大きな自己(ハイヤーセルフ)」が送ってくれるものだと考えられる

●高等シャーマニズム

自然に生まれるものを、善なるものとして肯定

※逆に、間違った信念は、自然に生まれるものを否定、制限する

心身上の病理の根源的な原因:ハイヤーセルフや守護霊などと呼ばれる根源的な自己とのつながりを失うことから生まれる ⇒ 根源的な治療は、それとつながり、そこからの自然な創造、展開を促すこと

・天上世界:守護霊や神霊的存在から助言やインスピレーションをもらう

・中間世界:個人的な庭園(現在の自分の姿が庭園の姿で表現され、それを手入れすることで自分を治療することができる)(問題意識に対応した精霊などをここに呼んで、助言や力をもらって解決のきっかけにする)

・地下世界:原初のエデン(無垢になれる場所)、傷の部屋(過去のトラウマを探す)、契約の部屋(自分が信じている信念やその起原を探す)、恵みの部屋(完全な自分の姿を見る)、宝物の部屋(様々な宝物がある)

●トーテミズムと先祖信仰

原初的な狩猟文化・部族文化の宗教:アニミズム(精霊信仰)

⇒ 人間、動物、植物、さらには、石のような自然物、天体にも、魂が宿っていると考えられる

※人間の魂と他の存在の魂(精霊)には本質的な差はない

※アニミズムは、人間が最も長い時間を生きた世界観であり、人間の心の構造が正直

に反映された世界観であると言える

- すべての人間、生き物の魂や天体は、地上世界と冥界の間を循環する
- 人間の魂は、やがて祖霊(先祖霊)になる
- 人間の先祖:トーテム祖先(人間と、動物、あるいは植物、自然物や天体などの魂が融合したような存在)

●ライフサイクルと通過儀礼

① 成長のプロセス :誕生→成人:この世での個別化

誕生(受胎→出産)→名付祝→初宮詣→七五三(子供組加入)→十三参り→成人式(若衆組加入)→結婚・就職

② 成熟のプロセス :成人→死 :この世での普遍化

隠居→年祝(還暦→古稀→喜寿→傘寿→米寿…)・年寄(長老)

③ 祖神化のプロセス:死→祖神 :あの世での普遍化

葬儀(死霊化)→埋葬(精霊化)→年忌法要(祖霊化)→弔い上げ(祖神・氏神化)

④ 祖神としての期間:祖神→誕生:あの世からの個別化

一般的な氏神の祭り、盆・正月など、定期的にこの世を訪れ、子孫に生命力を与える

●アボリジニのコスモロジーと高位イニシエーション

ドリームタイム:地上世界(日常の認識世界)を作っている基盤となる世界、地上の形態を形成する創造力であり、その原型
(一種の「アイデア」、「元型」のような存在)

内的・心的・潜在的なものが、外的・物質的・具体的なものになるという創造のプロセス

高位イニシエーション

- 天空、地上、地下の3つの領域を自由に往来できることを目指す
- 天空のエネルギーと一体になる
- 天空の英雄とトーテム先祖が司る

- ・死に臨んだ長老は、青空を眺めて、そこに見える光の粒子と一体化する瞑想を行う

～農耕文化～

憑依型の女性シャーマン(霊媒、巫女)が中心

穀物の豊穡のために ⇒「天の豊穡神」と、「地の豊穡神(地母神、田畑の女神)」が結びつく(「天地の聖婚」が必要)

※狩猟文化では地母神と傷つける行為としてタブー視される大地の耕作にも、「聖婚」の観念が生まれ、鍬が男根に譬えることになった

- ・原地母神の両性具有的存在から、単性の男(父)性神「天神」と、単性の女(母)性神「地母神」が分離し独立

⇒ 天空と地上・地下の分離、善と悪の分離も進んだ

- ・冥界:豊饒や再生よりも、死や病気をもたらす存在として、悪という性質が強くなった

- ・創造を行う主体が、原地母神から、この世の人間になった

※意識や自我が無意識を管理するという考えや、人間の自然な無意識の創造力を否定する考えにつながる

～心理的に妖怪を開放して智恵にする方法～

「精霊」が抑圧された存在:「妖怪」

- ・狩猟文化の流れから来る、フォーカシング指向心理療法の「フォーカシング」や、プロセス指向心理療法の「プロセス・ワーク」の方法により、心理的に、「妖怪」を自由で開放された「精霊」に戻し、そこから智恵を得ることが可能

【狩猟文化の世界観から見る仏教の役割についての考察】

伝統文化の中でも、原初的な狩猟文化の世界観は、人類が数万年を生きた世界観であり、人間の心の構造を正直に反映した普遍的な価値観であると思われる。

だが、文明が発達した現代社会において特に、この世界観の中での、一般社会の常識では生きていけない溢れ者と呼ばれる人々が出てきてしまうのもまた事実である。

＞正常ではない魂は、死者の世界に入って「祖霊」になれず、地上を彷徨って死霊のままにとどまり、人間に災いをもたらすと考えられました。
例えば、あまりに悪行を行った人間、恨みを持って死んだ人間、異常な死に方をした人間、若くして死んだ人間、子供を持たずに死んだ人間の魂などです。

引用：<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-09>

このような、溢れ者と呼ばれる人々を救済する側面が、仏教にはあるように思える。

＞その中で、釈迦は、王国でもなく、部族社会でもなく、第3の方向を目指しました。仏教の解脱思想、「空思想」は、「一」に統一する王国の世界観を否定すると同時に、部族社会の世界観をも否定するものでした。

引用：<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-10-22>

通常、順当に結婚して子供を授かった者は、通過儀礼における「祖神化のプロセス」において、

葬儀(死霊化)→埋葬(精霊化)→年忌法要(祖霊化)→弔い上げ(祖神・氏神化)

を経て、魂が悪霊にならずに正しい方向に進むように、残された親族によって儀礼が執り行われるのが通常の流れである。

参考：<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-10>

だが、このような例に該当しない「正常ではない魂」と呼ばれる人々は、「祖神化のプロセス」において、頼れる親族がいない場合もある。

そのような人々が死後、無事に浄化され、祖霊になるためには、「自分自身で自分を救済する」必要がある。

そこで浮上してくるのが、仏教なのかもしれない。

正常ではない魂が持つカルマを、自ら仏教の教えにより解消していくことによって、自らを普遍的な方向に浄化していく。

これが、仏教の教えの本質なのかもしれない。

また、「家系」「先祖」について、こちらの文章を引用したいと思う。

> 初期の狩猟文化は、数家族からなる流動的なバンド単位で、定住せずに移動生活を行っていました。

ですが、徐々に、主に漁撈の生産量が多い場所から定住生活が生まれました。

日本では縄文時代の早期に定住化が行われました。

遊動文化では、家族制度は、双系で、出自が組織化されておらず、従って、「家系」という観念を伴いませんでした。

ですが、定住にともなって、氏族社会が成立し、出自が女系、もしくは男系に組織化されます。

これに伴って「先祖」は、一つの「家系(氏)」の先祖となります。

そのため、「先祖」は純粹に普遍的な靈魂ではなく、氏族としての個性を持つ存在になります。

引用:<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-05>

こちらの文章からわかるように、本質的には「先祖」は氏族としての個性ではなく、「純粹に普遍的な靈魂」としての先祖であると思われる。

仏教で言うところの涅槃に入るという概念は、狩猟文化においては「純粹に普遍的な祖靈」になること、つまり、原地母神の創造性と一体化することであるのかもしれない。

【仏教の歴史は、原点回帰の歴史である説】

原初的な、狩猟文化の「アニミズム」的な世界観においては、原地母神の創造性と一体化が世界観の本質であった。

参考:<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-05>

また、この頃の世界では、天と地下、善と悪という概念は分離されていなかった。

参考:<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-08>

家系という観念も存在しなかった。

参考:<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-05>

これらの価値観は、仏教の「空」の概念へと繋がる価値観であるとも捉えることができる。

また、偉大なシャーマンは魂の世界に留まり続けて、再生することがないと考えられていた。

これは、「解脱」思想の原型とも言える。

参考:<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-09-27>

つまり、仏教思想の原型とも言える思想は、狩猟文化の頃から存在していたのである。

※唯一の決定的な違いは、創造性の肯定 or 否定の部分である。

では、なぜ仏教は後世になって誕生したのであろうか。

それは、文明の発達が鍵になると思われる。

文明が発展する前の、原初的な狩猟文化においては、原地母神の創造性と一体化する形で社会が形成されていたため、
統合的でかつ創造的な社会がある程度は実現されていたのであろう。

だが、文明の発展と共に、天と地下、善と悪は分離し、家系という観念も生まれた。

やがて、貧富の差も生まれた。

そんな社会の中で、仏教思想の必要性が増してきたため、仏教が誕生したのであろう。

参考:<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-10-22>

そして、時代と共に仏教は発展していき、やがて密教が誕生した。

特に後期密教は、原初的な狩猟文化の世界観への原点回帰であると言えよう。

～補足～

ヨーガ(瞑想)の誕生の経緯

>インド最古の文献『リグ・ヴェーダ』には幻覚作用のある植物とみられるソーマが登場し、祭祀で重要な役目をはたしていたが、アーリア人はインド移住によってソーマを入手できなくなったと思われ、意識の変性を引き起こす苦行とヨーガが発展していった。

引用:<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A8%E3%83%BC%E3%82%AC>

【「後期密教」と「狩猟文化の原地母神信仰」との共通性の比較】

参考、引用元サイト

- <https://ameblo.jp/morfo/entry-11029556433.html>
- <https://ameblo.jp/morfo/entry-11059590347.html>
- <https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-05>
- <https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-10-15-1>
- <https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-17>
- <https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-10-06>
- <https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-04>
- <https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-10-04>
- <https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-09-29>
- <https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-10-26>
- <https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-09-25>

[後期密教の背景思想]

根源的な意識の母体(空)から、「意味の種」と言うべき「光」や「音」、「種子」を経て元型的・象徴的な動的なイメージ(象徴物・諸尊像など)が生まれ、最終的に形の定まった言葉やイメージで構成される日常の認識世界が生まれる。

根源的な意識の母体は、イメージも言葉もない、無分別、無相、主客のなし状態であり、元型的・象徴的イメージは、動的・創造的で、「意味の種」の状態であり、外界を写したイメージではなく内的に生み出される存在である。

曼荼羅は体系化された、清浄な元型的イメージの表現である。

概念やイメージが固定的で二元的であるため煩悩が生まれ、それらが清浄な尊格と結びついた動的なものになれば、煩悩はなくなり、かつ、創造的になる。

曼荼羅は、マクロコスモス(外的世界)とミクロコスモス(内的世界＝心身)の両方の根源的な力の全体が、束縛されずに創造的に現われた姿である。

「究竟次第」の瞑想法は、「霊的生理学(気の身体論)」をベースにして作られている。

気の身体は、「気の身体の種(心滴＝ティクレ、ビンドゥ)」の状態から、骨格となる主要な気の脈管(ツァ、ナーディー)が生まれ、最終的に全身を流れる脈管としての気の身

体が作られる。

気が末端的な場所・構造にある時は、意識も日常的であり、気が根源的な場所・構造にある時には、意識も根源的になる。

インド神話には、典型的なシャーマニズムのコスモロジーがあり、シャーマン的な神話もある。

「プラーナ」の宇宙論は部派仏教の「俱舍論」の宇宙論とも似ている。

世界の中心には世界山の「メール山（須弥山）」がある。

天上は何層にも渡る世界がある。

地下には7層の世界がある。

[狩猟文化の原地母神信仰]

地上の存在は、人間も動物も、植物も、鉱物も、太陽などの天体も、すべて「原地母神」の子供であり、

それらはすべて人間の親戚であり、その魂に本質的な違いはない。

狩猟文化のシャーマン的な神秘思想の核心は、日常的な自我を殺すことによって、「原地母神」として表される創造力に合一し、再生することである。

シャーマンがトランス状態に入る時、あるいは、入った時に、典型的に現れる言葉やイメージ以前の生理的な「幻視」と「幻聴」がある。

これらは、「魂の世界への入口」、「変身への入口」だとも考えられている。

※幻視は、「内部閃光」などと称される、幾何学的な図形

※幻聴は、「ブーン」という蜂の飛ぶ音や、低い唸り声のような音

「ドリームタイム」の世界は、大地の中に種や根があるようなイメージで捉えることができる。

この「種」は、一種の「アイデア」、「元型」のような存在である。

「ドリームタイム」から地上世界が生まれることは、内的・心的・潜在的なものが、外的・物質的・具体的なものになるという創造のプロセスである。

「パワー・オブジェクト」や「スピリット・ヘルパー」には多くの種類があり、これを4方に配置したり、12の月に配置したりして、体系化がされていることもある。

これは、後世におけるマンダラや象徴体系の原型と考えることができる。

体の中には、一種の生命の樹がある。

これをつたって体の中を昇降する靈的エネルギーは、「天の雫(体の稲妻)」と呼ばれる。

そして、体に3つの靈的センター(頭頂、心臓、肝臓)があると考えられている。

インドや中国で発展した靈的生理学に近いものが、マヤ/トルテカにも存在した。

ツングース、ラップ、ヤクートなどでは、シャーマンの「秘密言語」があり、シャーマンは、イニシエーションでその習得が必須のものとなっている。

儀式などで、精霊との会話で使う。

トランスになって、精霊を呼び出す「パワー・ソング」で使われることもある。

シャーマンは、「秘密言語」を先輩シャーマン、もしくは、精霊から直接、教わる。

「精霊」的存在は、怪物のような恐ろしい存在であると同時に、知識を授けてくれる教師的存在でもある。彼らによって、体の各部位を表す呪術的な言葉を教えられ(言わされ)、様々な病気の原因と治療に関する知識を得る。

呪術的な言葉は、体の各部位を操作する力を持つ。

「天上」、「地上(中間世界)」、「地下(冥界)」

世界の中央には大きな樹(世界樹、宇宙樹)があつて、3つの世界をつなげている。

あるいは、大きな山(世界山)がある。

天は複数の層(7層や9層というのが多い)から構成されている。

地下にもいくつかの層があると考えられることもある。

[比較]

～比較1～

●後期密教

根源的な意識の母体(空)⇒「意味の種」と言うべき「光」や「音」、「種子」⇒ 元型的・象徴的な動的なイメージ(象徴物・諸尊像など)⇒ 形の定まった言葉やイメージで構成される日常の認識世界

●狩猟文化の原地母神信仰との比較

・原地母神:根源的な意識の母体(空)

・シャーマンがトランス状態に入る時、あるいは、入った時の、典型的に現れる言葉やイメージ以前の生理的な「幻視」と「幻聴」:「意味の種」と言うべき「光」や「音」、「種子」

～比較2～

●後期密教

曼荼羅:体系化された、清浄な元型的イメージの表現 ⇒ マクロコスモス(外的世界)とミクロコスモス(内的世界＝心身)の両方の根源的な力の全体が、束縛されずに創造的に現われた姿(煩悩がなく、かつ、創造的)

●狩猟文化の原地母神信仰との比較

・「パワー・オブジェクト」や「スピリット・ヘルパー」には多くの種類があり、これを4方に配置したり、12の月に配置したりして、体系化がされている:後世における曼荼羅や象徴体系の原型

・「原地母神」として表される創造力に合一し、再生する:マクロコスモス(外的世界)とミクロコスモス(内的世界＝心身)の両方の根源的な力の全体が、束縛されずに創造的に現われた姿(煩悩がなく、かつ、創造的)

～比較3～

●後期密教

霊的生理学(気の身体論)

「気の身体の種(心滴＝ティクレ、ビンドウ)」の状態 ⇒ 骨格となる主要な気の脈管(ツァ、ナーディー)⇒ 全身を流れる脈管としての気の身体

●狩猟文化の原地母神信仰との比較

体の中には、一種の生命の樹がある

これをつたって体の中を昇降する霊的エネルギーは、「天の雫(体の稲妻)」と呼ばれる

そして、体に3つの霊的センター(頭頂、心臓、肝臓)がある

⇒ インドや中国で発展した霊的生理学に近いものが、マヤ/トルテカにもあった

～比較4～

●後期密教

マントラ

●狩猟文化の原地母神信仰との比較

「精霊」的存在によって、体の各部位を表す呪術的な言葉を教えられ(言わされ)、様々な病気の原因と治療に関する知識を得る

呪術的な言葉は、体の各部位を操作する力を持つ
儀式などで、精霊との会話で使う
精霊を呼び出す「パワー・ソング」で使われることもある
⇒ マントラ

～比較5～

●仏教

須弥山世界

世界の中心:「メール山(須弥山)」がある

天上:何層にも渡る世界がある

地下:7層の世界がある

●狩猟文化の原地母神信仰

「天上」、「地上(中間世界)」、「地下(冥界)」

世界の中央:大きな樹(世界樹、宇宙樹)があつて、3つの世界をつなげている

あるいは、大きな山(世界山)がある

天:複数の層(7層や9層というのが多い)から構成されている

地下:いくつかの層があるとも考えることもある

【「シャーマン病」「クンダリーニ症候群」普通の人々が踏み入てはいけない領域であり、
人が踏み入てはいけない領域に近いギリギリの領域である説
「フォーカシング指向心理療法」「プロセス指向心理療法」一般的な実践としては、こ
ちらが有効である説】

●シャーマニズムにおけるシャーマン病

伝統的なシャーマニズムの社会では、シャーマンは自ら望んでなるものでもなく、自
らの力でなれるものではない。

最も本質的なのは、霊的存在による選別である。

通常、シャーマンになることを受け入れるまで、長い期間に渡って、疾患的な状態を経
験する。

これは「シャーマン病」と呼ばれ、幻覚、無気力、夢遊、ヒステリー性発作、けいれん、
動物的行動などを伴う。

この状態は、トランスによるヴィジョンを引き起こし、シャーマンとしてのイニシエーションや教育につながる。

参考:<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-09-27>

●クンダリニー・ヨーガや後期密教の究竟次第におけるクンダリニー症候群

クンダリニー症候群、生理的クンダリニー症候群(略称・PKS)は、霊的・精神的・身体的な準備ができていないにもかかわらず意図的または事故等によりクンダリニーがある程度覚醒してしまったために、様々な快・不快の症状を発症することである。

中毒症状や病気、過労、仙骨付近の負傷、臨死体験(NDE 後遺症)などにより発症する可能性がある。特に臨死体験(NDE)経験者が最もクンダリニー上昇に近い経験をしているという主張が欧米の研究者を中心になされている。

参考:

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%B3%E3%83%80%E3%83%AA%E3%83%8B%E3%83%BC>

●魔境

魔境(まきょう)とは、禅の修行者が中途半端に能力を覚醒した際に陥りやすい状態で、意識の拡張により自我が肥大し精神バランスを崩した状態のことを指す。

参考:<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AD%94%E5%A2%83>

●以上のことを踏まえた上で、本質とは何かを考えてみると

煩悩によって特定の形へと固定化した感情や感覚を、単に「止滅」させるのではなく、それを無形の力動的な創造力に「解き放つ」つことで、悟りを目指す。

これが本質的な部分であり、「フォーカシング指向心理療法」や「プロセス指向心理療法」が実践として有効なのだろう。

参考:<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-30>

そして、「原点回帰」

【最も、基本的な実践方法は「祈り」である説】

＞祈りは、最も基本的な宗教行為や民間信仰の一つである。

＞「教義や教則、またそれらを含めた聖典や教本をもつ宗教」に限らずそれ以前に、世界中の古代文明において発生したシャーマニズム(祈祷・占い・呪術・薬草による医療行為・神との交信)や祖霊信仰や自然崇拜・精霊崇拜アニミズムの日(太陽)や流れ星に至るまで、対象が漠然としたものに対する感謝などの、意思の表明や表現や現象に対しての活動でも同語が用いられ、一概に祈りというものが特定宗教における価値観とは別の、より根源的な欲求に基いた人間の活動様式であることも見て取れる。その対象も時と場所や個人の思想によって様々であるが、祈りという活動は、人間の社会において普遍的である。

引用:<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%88%E3%82%8A>

一般の人々が行う、最も基本的な実践方法は「祈り」であり、それは、「全ての現象は『原地母神』の創造であると捉え、良いこと悪いことを含めた全ての現象は私へのメッセージであると捉え、『原地母神』に全てを感謝する」このようなことなのかもしれない。

また、仏教や宗教全般における「修行」というのは、原初的な狩猟文化の世界観における「シャーマンになるため」の修行であると思われる。

シャーマンになる根本的な目的というのは、「人々を救い、人々を守ること」である。

参考:<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-09-24>

ゆえに、仏教や宗教全般における修行の目的における大前提は「人々を救い、守るために修行する」である。

一般向けの最適な実践方法は「祈り」であり、多くの人々を救い、守るための最適な実践方法が「修行」であるのだろう。

※だが、おそらくこれは眠りの時代においてのことであり、目醒めの時代においては1人1人がみんなシャーマンになる時代であると思われる。

【最も、最適な「祈り」の方法は、神社やお寺に参拝することである説】

「祈り」を実践する上で、具体的にどのように行うことが最適であるかについて考えたところ、

実はその答えは身近なところにあった。

それは「(身近な)神社やお寺に参拝すること」である。

(少額ずつでも定期的に)お賽銭を入れることで「お布施」となり、徳が積まれ、感謝の心を持って「祈り」を捧げることで、心が浄化されていく。

このような意味で、

神社やお寺に参拝することが、最適な実践方法であると思われる。

お七夜と命名

初宮詣、初寺詣

お食い初め

初節句

初誕生

七五三詣

十三詣

結婚式

厄除け

歳祝い、賀寿祝い

神葬祭、寺院葬

これらの「人生儀礼」において、神社やお寺に行く機会がある。

だが、日ごろから神社やお寺に参拝することも大事なことである。

具体的な参拝方法については、こちらのサイトを参考にしてください。

<https://www.oshiete-oterasan.com/sp/knowledge/c-sanpaijinjya.html>

<https://www.oshiete-oterasan.com/sp/knowledge/c-sanpaitera.html>

※だが、おそらくこれは眠りの時代においてのことであり、目醒めの時代においては1人1人がみんな自分自身がパワースポットになる時代になると思われる。

【私個人の思想】

私個人が「理想」だと思う境地、
こういう境地を目指したいと思う「理想の姿」についての思想を語りたいと思う。

私は人生において、こういう境地になりたいと思って生きている。

それは、
「無所有の状態ですべてになれる境地」である。

真理は外にあるのではなく、自分の内側にある。

真理を知りたいと思うならば、自己意識の深層の中枢を観察すれば良い。

※その実践方法の1つとして、サマタ瞑想がある。
(だが、そのサマディに執着しない)

何も所有する必要はない。
なぜならば、所有しているものは全て「生きている間」だけしか所有することができない。

それに執着したところで、いつか必ず手放す時が来る。

私の思う究極的な幸せとは、「無所有の状態ですべてを悟り、無所有の状態こそが最高の幸せである」という境地である。

無所有、だが孤独ではなく、全てと繋がっている。

幸せとは、繋がりが合点である。

自分が今ここにいる。
ただそれだけで幸せである。

※現代の常識においては、最低限所有しなければ生きていけないものに関しては所有せざるを得ないため、最低限のもののみ所有することになる。

※また、家庭を持つことに関して、家族という存在は「独立した1人の人間」であり、私が所有しているわけではなく、独立した1人の人間同士尊重し合い、繋がり合う境地が理想的であると私は思う。
血縁の近さは、繋がり深さであり、家族とは、繋がり深い間柄である。

【シャーマンの伝統世界における、世界の構造について、改めて解釈】
シャーマンの伝統世界における、世界の構造

世界樹(世界山):三世界をつなげている

●天上世界

・創造神、天神、指導霊、守護霊、英雄、元型、ハイヤー・セルフ

●地上世界

●地下世界(冥界)

・パワーアニマル、援助霊、祖霊、精霊、妖怪

～解釈～

ハイヤー・セルフとは、高次元の自分自身であり、「本来の自分」というのは、天上世界にいる存在。

地下世界とは何か？と考えた時、
おそらく、「過去世から未来世まで含めた、様々な人生経験の『記憶』や『想念』の情報

(データ)」ではないかと解釈できる。

それは、高次元の本来の自分が持つデータであったり、さらに高次元の神の存在が持つデータであったり。

そして、パワーアニマルや援助霊とは、高次元の本来の自分がさらに分霊してできた存在であり、

本来の自分が持つ様々な側面のそれぞれのデータを司っている。

輪廻転生とは、その分霊した様々な側面データの内、未浄化な部分(妖怪)を一部引き継いで、精霊に浄化するために転生したり、

必要なデータのみを一部引き継いで転生する。

その一連の過程が輪廻転生なのだろうと解釈できる。

そう考えると、今ここに存在している私という存在も、「未浄化な部分を浄化したい」という人生の目的を生まれる前に設定して生まれてきているということになり、

全ての出来事には意味があり、全ての出来事は、自分を浄化してくれるものである。

ゆえに、全てに感謝して生きていくことが幸せに繋がるのであろう。

～解釈まとめ～

天上世界:本来の自分がいる世界

地下世界:様々な経験データ

地上世界:本来の自分が、様々な経験データを一部引き継いで、それを具現化させた世界

【霊界、幽界と、シャーマニズムの天上世界、地下世界について】

神界、霊界、幽界、幽現界という世界があるが、
シャーマニズムにおいては、「天上世界」「地上世界」「地下世界」と三世界に分かれている。

双方の関係性をどのように解釈するかについて考えた時、

神界、霊界：天上世界

幽界：地下世界

幽現界：地上世界

と解釈できるような気がする。

天上世界の中の最高天に位置するのが、神界であり、創造神、天神といった存在がいる。

天上世界の中の下方に位置するのが、霊界であり、指導霊、守護霊、ハイヤーセルフといった存在がいる。

そして、幽界というのはシャーマニズムにおける地下世界であり、パワーアニマルや祖霊、精霊といった存在がいる他、様々な想念がある場所である。

幽現界は地上世界に位置し、地上世界を彷徨っている存在が一般的に霊として現われると思われる。

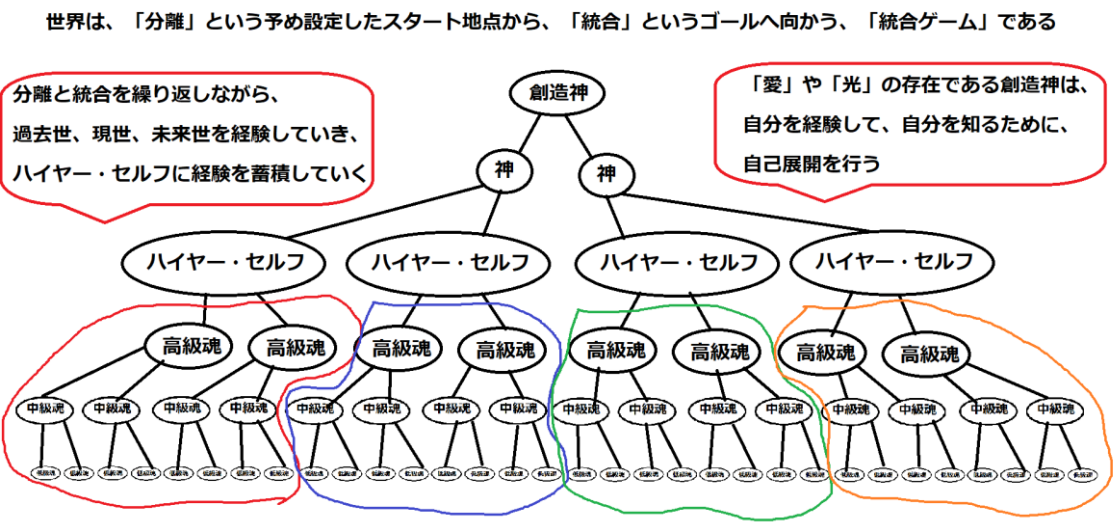
神界、霊界、幽界、幽現界については、こちらを参照

https://www.youtube.com/watch?v=JwJx_A9fhp0

シャーマニズムの世界観については、こちらを参照

<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-09-25>

私個人が解釈した世界の仕組みを絵にしてみました。



また、前回の記事で記載した、

天上世界:本来の自分がいる世界

地下世界:様々な経験データ

地上世界:本来の自分が、様々な経験データを一部引き継いで、それを具現化させた世界

と解釈することもできると思われる。

【本来の自己を思い出す】

人間の文明の成長過程は、人間が赤ちゃんから子供時代を経て大人に成長する過程に似ているような気がする。

そして、ある段階で気が付く。赤ん坊の頃が一番神に近い存在であったということに。

エーリヒ・フロムの著書『自由からの逃走』にはこう書かれている。

・人間の社会史は、自然から人間が分離した時に始まった(始まった直後は、多くの束縛がある一方、帰属感と安心感があった)

※赤ん坊が生まれて、しばらく母親と一体である時期

→ 第一次的な絆

・中世末期に、西洋人は第一次的な絆から解放された

※思春期の子供は、自己を意識し始め、親の庇護から解放される

・解放と同時に、自由を獲得した。だが、自由を獲得すると同時に、社会的責任と孤独と不安が発生した

外的自由の獲得と共に、内的束縛を生んだ

→ 本質的自己と社会的自我の乖離 → 自由の重みに耐えきれなくなる → 自由からの逃走

・権威主義(権威に服従することによる安心感 → だが、第一次的な絆にはなり得ない)

・機械的画一性(本質的自己の封印による、社会的自我として生きる道)

・自由を求めれば孤独感が増し、孤独を解消しようとすれば自由がなくなる

→ 解決策:全統一的なパーソナリティの自発的行動

(自分の本当の思想と欲求を認識し、自由に付随する孤独を受け入れ、自発的な行動をすること)

→ 理想型:子供(真の自己の欲求に素直に従って行動し、また第一次的な絆にも守られている)

→ 社会的常識という匿名の権威から自由になり(内的束縛から脱却)、それによる孤独感を受け入れ、自由を自発的に獲得する

→ 自発的行動の過程自体を目的とする

- 社会的な情報に影響されない自発的な行為
- 自発的な行為をするためには
- フロムの著書『愛すること』に繋がる

参考:<https://www.youtube.com/watch?v=CpYhLjKpsb0>

～私個人の考察～

生まれたての赤ん坊は、母親からの愛情という庇護下に置かれている。
それは創造神から個人の魂が分離していない状態に似ている。

だが、大人に成長するに連れ、母親の庇護下から独立していき、
その独立に際して、自由を獲得すると共に苦痛も伴う。

そして、その苦痛の原因は「本来の自己と乖離した自我意識」にあったと、いつしか気付く。

そして、気が付く。

「赤ん坊の頃に無償の愛を持って育ててくれた母親、その母親の持つ無償の愛を『独立した自分自身』が持つことで、本来の自己を思い出せるのではないか？」ということに。

魂レベルで言うなら、世界の創造神である「神」が持つ『無償の愛』を、独立した自分自身が持つことで、本来の自己を思い出せるのだろう。

【睡眠は、特殊な輪廻転生的一种である説】

後期密教、タントリズムではこのように考えられている。

＞タントリズムでは、「人間の1日」の周期と、「人間の一生」の周期と、「宇宙」の周期と「神の1日」の周期を重ねて考えました。つまり、「睡眠／夢見／覚醒」と「死の瞬間／魂の世界での死後生／物質的な人生」、そして「宇宙が神の中に留まる段階／魂の段階にある宇宙／物質的な状態にある宇宙」と「神の睡眠／神の夢見／神の覚醒」です。

引用：<http://blog.livedoor.jp/morfo/archives/51724580.html>

上記のことを考察してみると、毎日の睡眠自体が「今日の私」から「明日の私」への輪廻転生であると捉えることができる。

通常の輪廻転生は、自我と身体そのものが変わるが、睡眠の場合は自我と身体が継続される輪廻転生であるため、
特殊な輪廻転生であると捉えられる。

臨死体験は、脳活動が完全に停止した状態で見えるヴィジョンであるため、直接的なあの世の表現として記憶に残り、
一方、普段の睡眠時に見る夢は、レム睡眠という脳活動がある状態で見えるヴィジョンであるため、間接的で比喩的な表現として記憶に残るのだろう。

臨死体験時も、普段の睡眠時も、どちらもあの世に魂が帰還していると捉えることができる。

そして、おそらくであるが、睡眠とは「個を維持するための魂のエネルギーのチャージ」であり、
それにより、睡眠の前後で自己同一性が保たれているのだろう。

【「1人1哲学」「1人1宗教」、だがその元を遡っていけば、真理に辿り着く説】
結局のところ、「1人1哲学」であり、「1人1宗教」なのだろう。

各哲学や宗教には、その元となった影響を受けた何かがあり、その元をひたすら遡っていき、
行きつく先は、「旧石器時代」や「縄文時代」といった原始時代の宗教観にまでなってくるのだろう。

つまり、アニミズムやシャーマニズムといった世界各地の原始宗教における共通性の中に、真理が「ありのままに近い状態で」表現されているのだろうと、
そう解釈することができる。

これはまるで、以前私が「本来の自己を思い出す」の題名で書いた記事の内容にあるような、
大人になる連れ、本来の自己と自我意識が乖離していき、いつしかそのことに気付いて、本来の自己と自我意識が統合していくという、
このような気付きに似ていると捉えることができる。

【「意味」や「目的」は、本当は存在しない】
創造神が世界を創造した「意味」や「目的」
我々の魂が輪廻転生をする「意味」や「目的」

本当は「意味」や「目的」というものは、存在しないのかもしれない。

意味や目的を追い求めるのは、我々の自我、エゴであり、
本来の自己が発する本当の声の中には、意味や目的は存在しないのかもしれない。

そもそも、輪廻転生という概念や、ハイヤー・セルフという概念そのものも方便でしかなく、
実際のところは、死と共にワンネスの中に溶け込み、転生する時に再びワンネスの中から生まれるだけなのかもしれない。

善という概念も無い、悪という概念も無い、カルマという概念も無い。

シャーマニズムにおける祖霊とは、「未分化で様々な可能性を秘めている存在」である。

参考:<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-09>

狩猟文化から、農耕文化に変わったことで、天と地の分離と平行して、善と悪の分離も進んだ。

つまり、元々は善と悪という概念も存在しなかったということになる。

参考:<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-08>

また、家系という観念も存在しなかった。

参考:<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-05>

仏教の『般若心経』で説かれている内容は、狩猟文化の頃の価値観を思い出させてくれるものであるのだろう。

「意味」や「目的」という概念への執着を手放した先にある、
『ただ楽しい』『意味もなく夢中になれる』『その先に目的はなく、ただこれをする事そのものが好き』

これが本来の自己の本当の声であるのだろう。

参考:https://www.youtube.com/watch?v=6Q_6bFz1R1U

【「本当は存在しない」と同時に、「全ての可能性が存在する」】

前回の記事で、「意味」や「目的」は、本当は存在しないと記載した。

高次な神の次元に行くほど、仏教の『般若心経』で説かれている内容が真理になってくると思われる。

だが、シャーマニズムにおける祖霊は「未分化で様々な可能性を秘めている存在」であるように、

オーストラリアの原住民アボリジニの「ドリームタイム(日常の認識世界を作っている基盤となる原型、アイデア)」のように、

参考

<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-09>

<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-17>

「存在しない」と同時に、「全ての可能性が存在する」のかもしれない。

狩猟文化の頃は確かに、善と悪という概念も、家系という概念も「未分化」であるがゆえに、存在しなかった。

だが、農耕文化になったことで、未分化だったこれらの概念が実際に存在するようになった。

狩猟文化の頃に可能性として眠っていた未分化な概念が、農耕文化になったことで分化して、概念が発現したような、
そういう経緯なのかもしれない。

言うなれば、狩猟文化から農耕文化になり、国家が成立して、文明もさらに発展していき、それと共に価値観も変容していき…

どんどん未分化だった概念が分化して発現していく、この社会の発展そのものが「カルマ」なのだろう。

そして、その時代ごとに、その時代に合わせた哲学や宗教が誕生することにより、
どんどん複雑に分化した社会的価値観によって生まれた苦しみを、狩猟文化の頃への
原点回帰を促すことにより浄化しようという、そういう動きが生まれていったと思われる。

「存在しない」と同時に、「全ての可能性が存在する」

そして、あらゆる概念への執着を手放していき、
『ただ楽しい』『意味もなく夢中になれる』『その先に目的はなく、ただこれをする事その
ものが好き』
この本来の自己の本当の声を大切にしていきたい。

【真理は、ゴンドワナ型神話の中にある】

多種多様な世界の神話は、大きく2つのグループに分けられる。

ゴンドワナ型神話とローラシア型神話である。

ゴンドワナ型神話は、古い時代のものであり、最初に地球各地に広まったものである。

一方、ローラシア型神話は、そのあとに出てきたものであり、ゴンドワナ型を「上書き」する
ように広まったものである。

ゴンドワナ型神話は、
世界の始まり、世界の終わりに言及せず(世界は最初からすでにあり、今後もある前提)
明確な主人公や英雄がおらず、登場人物も神も動物もみんな「対等」の群像劇である。

対して、ローラシア型神話は、
世界の始まり、世界の終わりについての言及があり、各物語の間に、ある程度の時系
列の関係があり、明確な主人公や英雄も登場する。

引用:<https://mythpedia.jp/mythology/sekai-sinwa-gakusetu.html>

そして、おそらく Gondwana 型神話は、狩猟文化の頃の価値観を表しており、ローラシア型神話は、農耕文化以降の価値観を表しているのだろう。

＞ローラシア型神話は、神がいかに世界と人間を創造し、その後、人間がエクメーネ（居住地域）を拡大、やがて人間の中に自民族意識や権力が生まれたのかを語る神話である。

＞Gondwana 型神話は、そもそも人間と動植物や自然現象を区別しない時代、人間がその一員として森羅万象や動物、木々や花々と矛盾なく共存した時代の神話である。

引用：<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/54030?page=2>

『世界神話学入門』（著者：後藤明）

後藤氏は、Gondwana 型神話の特徴について、次のように述べている。

＞“一つだけ確実に言えることとして、人間も動物も、そして神や精霊も、地上において一緒に暮らしていたとされることである。

夜空の天体もかつては生命をもち、人々の隣で暮らしていたとされる。それらの間に上下関係、階層関係はなく、平等な、相互依存関係こそあるべき姿だという主張が、その基底にはあるように思われる。”（同書 P134）

引用：<https://aomatsu123.blog.fc2.com/blog-entry-348.html?sp>

オーストラリアの原住民アボリジニは言う、
「すべてのものは、すべてのものに繋がっている」

このような、アニミズムの世界観こそが、真理であるのだろう。

【植物や微生物は神に近い存在である説】

植物や微生物に宿る魂は、神に近い存在の魂であると思われる。

なぜなら、宇宙の自然現象とかなり統合された存在であるような気がするからである。

とするならば、神の持つ心というのは、植物や微生物に近い「意識を持たない、無意識的な心」であるような気がする。

我々、人間は神から最も遠い魂の宿る存在であると思われる。

なぜなら、植物や微生物とは最も遠い存在であるからである。

神から最も遠い存在であるがゆえに、宇宙とは独立した思考を持ち、分離的な主観的世界を有する。

であるがゆえに、心というものを持ち、意識を持ち、(実際には幻想だけれども)自由意志というものも感じることができるのである。

神から遠い存在であるから、自由意志というものを感じることができる。

そこに、我々の存在理由を見出すことができるような気がする。

そして、アメリカの動物行動学者ジョン・カルフーン博士の行った「Universe 25」という実験の中に、
我々のような心を有する存在と理想郷は合わない、という事実が示されているのかもしれない。

詳細:https://www.youtube.com/watch?v=p-SO_We75t4

自我や煩悩は、果たして本当に悪い存在なのだろうか。

自我や煩悩は確かに、苦しみを生み出す存在である。
だが、我々人間はむしろ、苦しみという刺激を生き甲斐に変換する世界を自ら望んだ存在であるような気がするの、気のせいだろうか。

悟りから遠いから、心を持つことができ、意識を持つことができるとも言える。

【我々に神の視点や、縄文時代の人々の視点や、他の生き物の視点を直接的には知り得ない】

我々は、今置かれている環境を基準にしか考えられない存在であるとも言える。

つまりは我々に、神の視点や、縄文時代の人々の視点、他の生き物の視点を直接的には知り得ない。

視点が違えば、見えてくる世界も全く違って来るのだろう。

神の視点から見た真理と、縄文時代の人々から見た真理、他の生き物から見た真理は違って来るのかもしれない。

今置かれている環境という非常に狭い領域からしか、世界を見ることができないという、非常にもどかしい現状が我々にはある。

『狩猟文化と農耕文化の思想の本質的な違いと、現世肯定の仏教について』というタイトルの記事で書いた結論を引用したいと思う。

> 同じ仏教でも、時代や宗派によって解釈は全然違って来る。

上座部仏教は「現世否定」的な側面が強い一方、後期密教やゾクチェンは「現世肯定」的な側面が強い。

世界の構造に普遍性があっても、その意味や解釈についての真理は1つだけではないのかもしれない。

【それでも、「無償の愛」という絶対的真理がそこにはある】

自我や煩悩は肯定しても良い。

人間臭さも肯定して良い。

かつては、それを望んで我々は自由を獲得しようとしたのだから。

自我や煩悩は肯定して良いけど、それでも1つだけ忘れてはいけない絶対的真理があると思う。

それは「無償の愛」である。

『神は愛なり』新約聖書ヨハネによる福音書 3:16、第一ヨハネ 4:16 の聖句

どんな立場になっても、どんな視点になっても、我々すべての存在には神が内在している。

「無償の愛」という絶対的真理が、そこにはある。

「無償の愛」の心を育む実践方法として、『慈悲の瞑想』を大切にしていきたい。

- ・私は幸せでありますように
 - ・私の悩み苦しみがなくなりますように
 - ・私の願いごとが叶えられますように
 - ・私に悟りの光が現れますように
 - ・私は幸せでありますように(3回)
-
- ・私の親しい生命が幸せでありますように
 - ・私の親しい生命の悩み苦しみがなくなりますように
 - ・私の親しい生命の願いごとが叶えられますように
 - ・私の親しい生命に悟りの光が現れますように

・私の親しい生命が幸せでありますように (3 回)

- ・生きとし生けるものが幸せでありますように
- ・生きとし生けるものの悩み苦しみがなくなりますように
- ・生きとし生けるものの願いごとが叶えられますように
- ・生きとし生けるものに悟りの光が現れますように
- ・生きとし生けるものが幸せでありますように (3 回)

- ・私の嫌いな生命が幸せでありますように
- ・私の嫌いな生命の悩み苦しみがなくなりますように
- ・私の嫌いな生命の願いごとが叶えられますように
- ・私の嫌いな生命に悟りの光が現れますように

- ・私を嫌っている生命が幸せでありますように
- ・私を嫌っている生命の悩み苦しみがなくなりますように
- ・私を嫌っている生命の願いごとが叶えられますように
- ・私を嫌っている生命に悟りの光が現れますように

・生きとし生けるものが幸せでありますように (3 回)

引用

<https://j-theravada.net/world/metta/>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%85%88%E6%82%B2%E3%81%AE%E7%9E%91%E6%83%B3>

もしくは、こちらの動画を参照:https://www.youtube.com/watch?v=3_YEXuAVR6Y

【神界、霊界、幽界について改めて考察】

アニミズムについて解説しているこちらの動画：

<https://www.youtube.com/watch?v=hIpvoS-WUkU>

動物の霊について解説しているこちらの動画：

<https://www.youtube.com/watch?v=3XirocINpZA>

これらの内容を基礎知識として改めて考察してみたいと思う。

アニミズムの世界観を表している、 Gondwana 型神話においては、登場人物も神も動物もみんな「対等」の存在であり、人間と動植物や自然現象を区別せず、人間もその一員として森羅万象や動物、木々や花々と矛盾なく共存していたとされている。

そして、動物の霊について解説している動画で言及されているように、動物の霊は幽界を飛ばして霊界に直接行くとされている。

幽界の世界は、生前の考え方や思想がそのまま反映される世界。

だが、動物には明確な思想や哲学といったものを持っていないため、(最初から悟っているといえる)

幽界に行くことはない。

そして、狩猟文化、 Gondwana 型神話の頃の間人は、動物が見ている世界観に近い世界観を見ていたということになり、

ゆえに、人間も神も動物もみんな対等の存在であるというアニミズムの世界観を持っていた。

つまり、この頃の間人も幽界という世界には行かず、直接霊界に昇っていったのであろう。

そう考えると、幽界という存在は、農耕文化になって文明が発達して以降の、様々な思想を生み出していった後の時代に生まれた世界であるといえる。

そして、おそらくであるが、直接霊界に昇れる存在は解脱しようと思えば自由に解脱できる魂であるとするならば、輪廻転生のループに囚われた原因そのものを、文明の発達に見出すことができると考えることができる。

悟りとは、アニミズムの世界観を持っていた頃のことを思い出すということであるといえる。

以上のように主に霊界と幽界について考察してみたが、(神界はおそらく、植物や鉱物、森羅万象そのものの世界であると私は解釈している)文明が発達し、幽界が生まれたからこそ、様々なフィクションや芸術を創造することができるようになったと言うことができ、それにより自由な創造性が発達し、心の世界が豊かになったと捉えることもできる。

【カルマの法則、純粹記憶、シャーマニズムの地下世界についての解釈】
仏教におけるカルマの法則や、アンリ・ベルクソンの純粹記憶について解釈してみると、

現象界が生まれるプロセスは、

●過去の記憶 ⇒ 心 ⇒ 現象界

この順で生まれると解釈できる。

これをシャーマニズムの世界観で解釈してみると、このように考えることができると私は思う。

シャーマニズムの世界観においては、「天上世界」「地上世界」「地下世界」の三世界があると考えられている。

そして、これを現象界が生まれるプロセスに当てはめてみると、

●地下世界 ⇒ 心 ⇒ 現象界(地上世界 or 天上世界)

と解釈することができる。

地下世界は、再生の原動力そのものであり、つまり膨大な記憶の貯蔵庫であると解釈でき、
地上世界の現象界を創る基盤となる。

そして、イニシエーションにより次元上昇し、地上世界の階層で暮らしていた魂が、天上世界に上昇(つまり解脱)すると解釈できる。

【運命愛という悟り】

この世はなぜ存在するのか？

という疑問について、バクティ・ヨーガにおいては「神の遊び、または戯れである」と説かれている。

参照

<https://youtu.be/goyg6ZMV6pM?t=971>

<https://sudarshanayoga.com/archives/1699>

科学的にも、仏教的にも、「自由意志は存在しない」という結論に行き着く。

もしかしたら、これは真実なのかもしれない。

ニーチェは「永劫回帰」という哲学思想を提唱した。

これを別の言い方で言い換えると、
「宇宙の始まりと終わりは同じであり、宇宙の始まりから終わりまで全ての運命は決まっ
ていて、この世からあの世へ行き再び輪廻転生して次の人生を歩んでいくというこの一
連の流れ自体もすでに予め決定されている流れである」ということになる。

この世での我々の行動、あの世に行った後の我々の行動、そして次に生まれ変わる人生、これら全てが決定されており、
この宇宙の始まりから宇宙の終わりまでの一連の流れ全てを「神」と言い、
＝創造神であると捉えることができる。

全ての可能性がただ永劫的に再生される。

これ自体が「神の遊び」であり、「戯れ」であるのだろう。

そしてこれを悟った先にある悟りが、ニーチェが提唱した「運命愛」であるのだろう。

これは、狩猟文化のシャーマニズムにおける、原地母神信仰の核心である「原地母神として表される創造力に合一し、再生する」ということにも繋がってくる。

【無色界の住人による世界の創造】

仏教の宇宙論においては、世界が生成される成劫、世界が存続する住劫、世界が破壊される壊劫、世界が存在しない空劫の4つの期間が「世界の始まりと終わりのプロセス」であり、
この一連の流れを一大劫と呼ぶ。

そして、この一連の「世界の始まりと終わりのプロセス」の流れは、欲界から色界までの話であり、そこに「無色界」は出てこない。

つまり、無色界は「世界の始まりと終わり」という時間的な流れに支配されていない世界であり、
要するに、創造神と本当の意味で一体化している世界であると言える。

無色界側の視点から見たら、「世界の始まりから終わりまでの一連の宇宙の姿」は、ひと塊になって同時に存在しているように見え、
無色界の住人にとっては、過去も現在も未来も無く、これら全てが同時に存在しているのだろう。

そして、無色界の住人こそが色界と欲界を創った存在であり、
バクティ・ヨーガ的に言えば「無色界の住人による遊び、戯れ」であるということになる。

だが、無色界の住人が色界と欲界を創造した真の理由というのは、我々欲界の住人にはわからない無色界の住人にしかわからない真理なのだろう。

【「存在しないと同時に全てが存在する」という悟り】

マルクス・ガブリエルの言う「世界」とは、「あらゆる対象の性質を全て持っている」であり、
全ての対象を包摂しているのが「世界」である。

そして、世界が存在していてもそれは存在として表出しない = 神を認識することができないみたいなもの。

存在を存在させるための何かを規定すると、その構造は無限に広がり終着点を設定することができなくなる。

※フラクタル構造においては始まりと終わりが無い

つまり、『世界』という全ての存在の入れ物のようなものは論理的に存在することができない。

世界が存在しないがゆえに、無限の意味の場が存在する。

引用:<https://www.youtube.com/watch?v=rM-HGDYNKEQ>

※詳細はこちらの動画をご覧ください。

つまり、これは仏教における「空」であり、「空」とは存在しないと同時に全てが存在するということであり、
この世界の構造を悟ることが、真理の悟りにおいて非常に重要になってくるのだろう。

無色界の

第1天「空無辺処」において「空間が無限大である」と悟り、

第2天「識無辺処」において「識が無限大である」と悟り、

第3天「無所有処」において「何物も無い」と悟り、

最高の天である「非想非非想処」において「何物も無しと思惟する定を超えて極めて味劣な想のみが存在する」と悟る。

参考:<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%84%A1%E8%89%B2%E7%95%8C>

仏教における色界と欲界がマルクス・ガブリエルの言う「意味の場」とすると、無色界はこの色界と欲界の全てを包摂する「世界そのもの」と言える気がする。

無色界には、極めて微弱ではあるが、たしかに想は存在している。

ゆえに、その想から「意味の場」が生まれてくるのだろう。

ここからわかることは、「無」は不可能であり、常に「存在」が生起する場が「世界そのもの」と言える。

※現代物理学においても、真空のゆらぎによって、何も無いはずの真空から電子と陽電子のペアが、突然出現し、完全な無(絶対無)というものは物理的に存在しないとされている。

別の言い方をすると、「無＝無限」であり、我々が一般的に想像しているような何も無いという意味での無は不可能であり、無＝無限であるがゆえに、無とは「全ての対象を包摂している」ということになる。

ゆえに、常に「存在」が生起する。

参考:<https://www.youtube.com/watch?v=cGsS1f7b9oI>

原初的な狩猟文化のシャーマニズムにおいても、無＝無限に近い悟りの原型が存在していた。

＞多くの部族の世界観では、死者は徐々に無個性な祖霊に帰一して、やがて、新しい霊魂として再生する

引用：<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-10-22>

＞個性を脱した魂というのは、未分化で様々な可能性を秘めている存在

引用：<https://morfos.blog.ss-blog.jp/2020-11-09>

「無個性」「様々な可能性を秘めている」

祖霊における、これらのキーワードに、無＝無限を見出すことができる。

そして、この「世界そのもの」を超越した境地こそが「涅槃」であり、如来のいる世界である。

【 $0=\infty=1$ についての解釈】

『宇宙一美しい奇跡の数式』（著：ノ・ジェス）の存在を知った。

著者がYouTubeに「神の解明」として、動画を投稿されている。

https://www.youtube.com/watch?v=144_eVf3OM4

<https://www.youtube.com/watch?v=LZEOZwWs9Kc>

この動画の解説を基に、私なりの解釈を記載したいと思う。

物質として目に見える世界は大きさ(実数)で表すことができる。

概念という目に見えない心の世界は(虚数)で表すことができる。

そして、この実数と虚数で表せられる性質を、1つの観点に固定化した世界(マルクス・ガブリエルのいう「意味の場」)が、私たち1人1人が見ている世界。

この観点という名の意味の場は、 ∞ 無限に存在し、
無限に存在する観点という名の意味の場を全て包摂しているものが「世界そのもの」であり、
全てを包摂しているがゆえに、マルクス・ガブリエルが言うように「世界は存在しない」つまり0で表せられる。

そして、この0~1~ ∞ の観点(意味の場)を自由に往来できる存在こそが、我々の真我であり、神であり、
0は、1も ∞ も全てを包摂しているがゆえに、
 $0 = \infty = 1$ という関係性が成り立つ。

このように解釈することができる。

この $0 = \infty = 1$ という世界の構造への気づきと理解が、仏教で言うところの「空の悟り」であると思われる。

Amazon の書籍説明欄にも、
>注目が集まっている「マインドフルネス」が最終的に行き着く境地——といっても過言ではないでしょう。
と記載されている。

2つ目の動画は、これを物理学の視点から説明している内容で、とても興味深く感じました。

【サイコシンセシス(統合心理学)についての解釈】

サイコシンセシス(統合心理学)とは、イタリアの精神科医ロベルト・アサジョーリによって創設された心理学で、
どうやらトランスパーソナル心理学の一分野らしい。

そのロベルト・アサジョーリが提唱した心の構造は、

参考サイト

<https://jyuntama.eek.jp/therapy-psychoanalysis/psychosynthesis>

こちらのサイトの図にあるように、
顕在意識の領域を中心に、個人的無意識の層が「上位無意識、中位無意識、下位無意識」と分かれ、
その周囲に集合的無意識の海があり、上位無意識の一番上にある「トランスパーソナル・セルフ(ハイヤー・セルフ)」と接している、という構造になっている。

中位無意識は、顕在意識と最も近い無意識で、最近の身近な出来事に由来する無意識である。

下位無意識は、原始的な欲求や様々な感情、抑圧された欲求や感情、過去に由来する様々な抑圧された記憶等を司っている領域である。

上位無意識は、個人の過去の経験とは無関係に潜在する、より高次のものに由来する無意識の領域である。

そして、より高次のものに由来する無意識の領域である上位無意識の一番上に、トランスパーソナル・セルフ(ハイヤー・セルフ)がある。

本来の自己であり、宇宙の根源とも表現される。

トランスパーソナル・セルフ(ハイヤー・セルフ)と直接接する領域に、集合的無意識があり、全人類に共通している元型がある。

人類すべての下位無意識から上位無意識にかけての領域にまで広がっており、過去から現在、未来にかけての全ての人類に共通する領域である。

～私個人の考察～

この心の構造を、(世界の様々な神話や宗教の原点とも言える)シャーマニズムの世界観から考察してみると、
天上世界、地上世界、地下世界の三世界のうち、

中位無意識は、地上世界に近い領域であり、
下位無意識は、地下世界の領域であり、
上位無意識は、天上世界の領域であると考察できる。

※シャーマンは、他者の無意識にアクセスすることで治療するものと思われる。

※下位無意識は、地球に生命が誕生して以降の記憶に由来し、上位無意識は、地球に生命が誕生する以前からの記憶に由来するものと解釈することができる。
つまり、中位無意識と下位無意識は地球上の物質界の生命に由来し、上位無意識は宇宙の領域と、さらにそれを超えた領域における魂に由来すると解釈できる。

そして、トランスパーソナル・セルフ(ハイヤー・セルフ)の領域に行くことで、瞑想におけるサマディの体験(宇宙との一体感)が得られるものと思われる。

その外には、人類や他の存在と共通の領域である集合的無意識が広がっており、そのさらに外には、「非二元」「空」の領域が広がっているものと思われる。